国語国文学専修
卒業論文成績優秀者
による研究成果
要旨集2020

副詞「さらに」の用法の歴史

文17-0564
西川 知輝

論文の概要

現在「さらに」という副詞には大きく分けて2種類の意味が存在しています。しかし、歴史上「さらに」にはその他にも3種類の意味が確認されています。そこで、コーパス等を使い用例を採取、意味の観点から用例を5つに分類し、その統計などを用いて副詞「さらに」を歴史的に分析する、ということが当論文の概要です。なお、調査には主に『日本語歴史コーパス』（CHJ）を用いており、調査対象年代は奈良時代（『万葉集』 759）～明治時代（『太陽』1925）までです。

調査方法

計5種類の意味のうち、2種はどの時代でも使用率が極めて低かったため、当論文では残りの3種に注目しています。さらに現代でも使われている①、②と、ほぼ使われていない③の割合差に関わることを時代別に重点的に分析しています。

①累加	②増幅	③呼応
さらに北へ向かう	さらに雨風が激しくなる	耳を貸す気はさらにない様子

ポイント① 江戸-明治 間での傾向の移り変わり

調査の結果、今日では使われていない「呼応」の用法が昔は「さらに」の主流な意味であったということがわかりました。しかし、江戸後期～明治において使用率の急激な逆転が起こり現在のような「累加」と「増幅」が主流である状態になったという結論に至りました。
また、同じ意味同士での時代による変質は見られませんでした。

「呼応」の用法の例文
・この娘、ただ栗をのみ食ひて、**更に**米のたぐひを食はざりければ、…(方丈記/鎌倉)
・#其馬まいらせよ#と宣へども、耳にも**さらに**ききいれず馳行く、…(虎明本狂言集/室町)
・今や詮議のあるかとて思ひ痛める胸の中、釘を打たるる八寸の給仕も**さらに**手につかず、…(心中万年草/江戸)

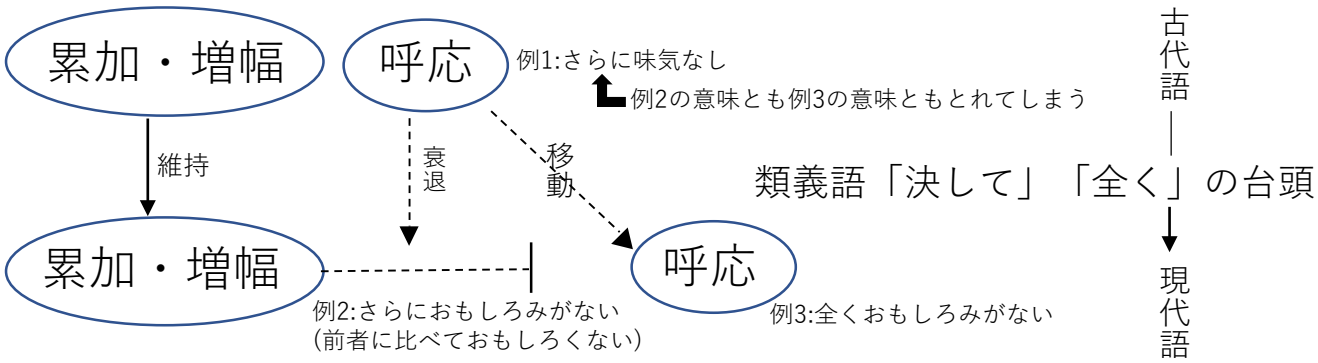
用例数	呼応	累加	増幅	合計
奈良	1(8)	8(67)	3(25)	12
平安	248(83)	35(12)	17(6)	300
鎌倉	128(86)	12(8)	9(6)	149
室町	20(100)	0	0	20
江戸	44(79)	8(14)	4(7)	56
明治初期	17(17)	48(48)	35(35)	100
明治後期	25(6)	324(78)	65(16)	414

・ 日本語歴史コーパスによる調査結果より一部抜粋
・ () 内は時代別の3種限定合計用例数に対する割合（単位は%）

また、江戸と明治の間が「さらに」の転換期であることを考慮し、『噺本大系本文データベース』(噺本)による調査を追加で行いました。CHJと噺本は同じ江戸の資料でも用例の年代分布の偏りが違っており、時代による「さらに」の変化をより詳細に示すことができました。年代の新しいCHJの方が、「呼応」の割合が低いということが読み取れます。

※%の合計が100でないのは頻出でない意味を2種割愛したため。

年代	1623~	1700~	1800~	合計
噺本	116	15	20	151
CHJ	0	16	41	57
用法	呼応	累加	増幅	（合計実数）
噺本	89%	4%	3%	151
CHJ	77%	14%	5%	57

ポイント② なぜ「呼応」が減少したのか

当論文では、口語/文語、話し言葉/書き言葉、出現作品、修飾の関係などから「呼応」の用法が衰退していった理由を突き止めようとしましたが、「さらに」単体の情報だけではそれが理由であるようなものを見つけることはできませんでした。そこで「さらに」の「呼応」と類義語にあたる「全く」と「決して」に関しての調査を行ったところ、江戸、明治時代で用例数の増加傾向がみられたため、「さらに」の「呼応」が持つ意味を類義語に任せるようになったのではないかという結論に至りました。「呼応」が常に完全な否定として使われているのに対して、「累加」「増幅」は肯定の要素も否定の要素も持っていないため、否定の要素として「さらに」が使われたとき、多義性が発生してしまいます。それを解消するために「呼応」が類義語に移動したのではないかと結論づけています。